

読書ノートは明日への架け橋

公益財団法人 文字・活字文化推進機構 理事長 肥田 美代子（童話作家）

文字・活字文化推進機構賞に選ばれた東京都の恵泉女学園中学校は、生徒に年間6回、年間6冊以上、ジャンルごとに定められた冊数の本を読み、満足度などをコメントした読書ノートの提出を求めている。

読書は自主的な行為であり、読書ノートの提出はその自主性を損なうのではないかという見方もあるかもしれない。というよりも、これまではそうした読書観がふつうのことであったし、子どもの読書行為に立ち入りたりすることを避けてきたようにおもわれる。読書教育は、日本の学校教育史のなかでは、非常に希薄な分野だったといっている。学校図書館を活用した読書指導が、いまなお未成熟なのはその名残かもしれない。

思案するまでもなく学校教育は、学校という教育施設に就学適齢期の子どもを集めて、1日のうちの一定の時間を校内にとめておいて、国語や算数、社会や理科その他いろいろな知識や技術を教え込む。この時間帯は拘束された時間であり、強制力がはたらいているのである。そうでなければ、学校教育は成立しない。読書も学校という教育施設で行われる限り、「指導」という強制力を必要とする。その目的は、あらゆる子どもが読書力をみがき、自主的に読書を楽しむ機会を手にするように導くことである。

恵泉女学園中学校が読書ノートを提出させる目的は、「小学校で身につけた読書習慣を失わず、一定期間内に一定以上の読書量を保つこと」にある。小学生の時、よく本を読んでいた子どもが、中学生や高校生になると読書から遠ざかる傾向にあることへの危機感の表明であろう。これは「朝の読書」の長所を伸ばし、弱点を克服するための視点ともなり得るし、小学校、中学校、高校をつらぬく読書教育のあり方を示唆したものであると受けとめたい。

読書ノートは、読書力を育てて、中学校に送り出した小学校の教師たちへの「引き受けましたよ」という温もりのあるメッセージともいえる。この次は、恵泉女学園中学校の教師たちが、少し背伸びし、もう少しむつかしい本に手を伸ばす読書欲を身につけた教え子たちを高等学校に送り出してくれることを願う。

読書ノートは、新しい世界への扉であり、明日への架け橋である。